



“恐怖の9番打者”から  
IT企業の社長になった  
芯がブレない生き様

(株) VENE BASE 代表取締役社長CEO

山口博史さん



スポーツ選手の引退は、人生の大きな岐路になる。三顧の礼を持ってスカウトされていても、現役時代にどれほど輝かしい成績を残していたとしても、次のステップ先は自分で探さなければいけない。41年前の1982年夏。甲子園を沸かせたのは「やまびこ打線」と呼ばれた蔦文也監督率いる池田高等学校。全国優勝を手にした決勝戦の試合終了と同時に全国の徳島県人がバンザイを叫んだ。

そのとき、華奢な体格で軽々と2試合連続本塁打を打ち、恐怖の9番打者と畏敬の念を持って評されていたのが山口博史さん(59)。「実は当時、1年の時からずっと3番だったんです。夏の県大会で優勝したときの首位打者でした」

毎日バットの素振り1000本を自分に課するなど、人一倍の努力を欠かさなかった。あるとき蔦監督に打ち方のアドバイス

をされる。打席に入り、アドバイス通りに2打席は打ったのだが、3打席目に監督が視界に入ってきたので、元の打法に戻して打った。

「そしたら、どこかで見ていたらしく、すぐ3番を外されてベンチに降ろされました(笑)」。その後、許されて背番号をもらえたものの、6番だった。「今後、3番を渡すかどうかかわからないとも言われましたけどね(笑)」

山口さんの野球のスタートは佐古小学校時代。佐古小のチームは強豪で、佐古小あいじつ―城西中学―徳島商業は県内少年野球の王道と言われた時代だ。

「入部に迷っていたら、田宮小のチームから背番号3をあげるからと誘われて田宮イーグルスに入りました。でも、入って見たら3番が3、4人いたんです(笑)」

当時、野球少年は誰もがジャイアンツの長嶋茂雄選手に憧れ、背番号3には特別な思い入れがあったのだ。

父親の仕事の都合で小3から脇町小学校に転校し、中学からは鴨島に引越し、鴨島第一中学に。

「野球部員が120人くらいいて、チームもそこそこ強かったけど、練習はきつかったし、先輩後輩の関係性も厳しかった」中2のときのこと。蔦監督が選手を見に来ていた。見込んだ選手のスカウト活動だ。

「当時の高校野球は箕島(和歌山)、浪商(大阪)の時代。僕は気持ちとしてはPLに行きたかったけど、お金がかかるから無理だなと思ってました」

山口選手には大阪、兵庫、福井など8校からスカウトがあった。その中で選んだのが池田高校だった。

甲子園優勝はいつの時代も高校球児たちのその先の夢を大きく膨らませてくれる。「プロになりたいと思っただけではないです。早稲田の野球部に進学したいと思ってました。そしたら早稲田から野球部の特待生として声をかけてもらったんです。ただ、特待生といってもお金はかかる。ウチにはそんなお金はないので諦めました」

「実業団では京都の日本新薬からも声をかけてもらえて。蔦監督はウチの経済事情を知っているから、社会人野球に行けと言ってたんですが、もやもやしたまま

返事を先延ばしにしてたんです。そして九州産業大学の野球部から、特待で毎月5万円の小遣いも出すと条件提示されて。大学野球としてはそこそこ強かった学校で、商学部経済学科に入学しました」

野球部はこれまでにないくらい上下関係が厳しかった。今ならシゴキや暴言はパワハラになる。コンプライアンスを大事にする時代では一発アウトなことでも、クラブの伝統だから、強くなつてほしいからとの愛情表現だ、などと理由づけして日常茶飯事になっていた。

「1、2年生はヤラれる側、3年はシゴく側、4年は神様という位置付けでした」  
3年に進級するとき、シゴく側になると思うと、そんな関係性に嫌気がさして辞めた。

野球特待での進学だったため、野球部の退部は退学に繋がる。けれども山口さんはその後、3年かかってアルバイトをしながら卒業した。

「将来自分がどうなりたいとか何をやりたいかとか、全くわからない状態だったんで、とにかく片っ端から本を読みました。でも、いわゆるビジネス書は読まなかったなあ」

その頃には漠然とだが社会の先端を行うシステム関連の仕事をしようと思っていた。就職先に求める条件は、20〜30人の少人数のソフト会社で、入社時に新人研修を開講してくれること。

「大企業だと仕事の一部分しか見えないじゃないですか。開発も営業も、全部を知っておきたかったので」

就職面接を受けるために、品川プリンスホテルを1週間予約した。

「野球の大学選手権のときに泊まっていたのが品川プリンスで、僕は他のホテルを知らなかったから(笑)。バイト代が吹っ飛んだけど、人生かかってましたからね(笑)」

リクルートの就職情報誌を手に千代田区九段下の「アドバンス」

システムテクノロジーズを訪ねた。20人弱の会社で、面接で履歴書を見た社長が「池田高校出身なのですか。筆記試験を受けていってください」と言われる。

実は彼、就職時に限らず、どんな場面でも自分から池田高校ナインの出身だとは言わないことにしている。もちろん、後にどこかで聞きつけた相手に驚きをもって確認されることはある。

そのとき、社長に連絡先を聞かれたが、まだ部屋も決まっていなかったため、「後で連絡先を決めて電話します」と答えていた。面接試験後、彼がその足で向かったのが千葉県の浦安。

「九段下の会社に電車一本で通えるところに部屋を借りようと思って探しに行っただけです」

まだ試験を受けただけだったが、彼には受かる勝算があったのだろう。



「最初は葛西(江戸川区)で降りて部屋を探したんだけど、高くて手が出なかった。それでその先の浦安まで行ったら見つかったんです」

彼の素早さは部屋探しだけでなかった。契約を済ませるとそのままNTTに行き、電話回線を引いた。

「それで番号をもらって、さっきの会社に連絡先ができましたって電話入れたんです」  
実は東京で就職試験を受ける前、仕事が見つかりやすいのではという理由で京都に職探しに行っている。

「大学を卒業したとき、徳島に帰ろうと思ったんですが、父親に、徳島に帰ってくるな」といわれたんです。野球人としての息子を誇らしく思っていたのに、野球を辞めたことが許せなかったんでしようね」

そこで京都でまずはバイト探し。  
「反物の染めは朝早いのでお金がいいか





ら朝は染め屋に行きました。そのあと昼もバイトして、夜は焼肉屋。美味しいもの食べさせてもらってました(笑)

システム関係の企業はやはり東京、と聞いて向かった東京での就職先では16人が採用された。入社後の研修では「毎日、同期で酒を飲んで夢を語ってました」

特段の知識もなかった山口さんが開発言語を学び、1年後には「次にこつちをやらせてほしい」と貪欲に覚えようとす姿勢を見せた。指導者に「いちいちそ

んなことを言うてくるヤツはいない」と言われたがその表情は笑っていた。

「開発は要件の定義で工程が決まってくるので、繰り返ししているとどこで何が起きるかがわかってくるんです。そしたら経営陣に入らないか」と声をかけてもらいました。でもまだもつと学びたいこともあったので、6年待ってくださいと答えました

三井信託銀行の証券代行システム、横浜銀行のシステムなど、大きな仕事を手がけるも、その後、甲子園での対戦がきっかけで交流を持っていた早実野球部OBの岩田雅之氏の経営する会社に移り、2022年4月に株式会社VENZ BASEを設立。代表取締役社長CEO。

農林中央金庫のシステム、信金センターの端末、横浜DeNAの試合チケットの販売システムの制作、神奈川県高野連の横浜スタジアムでの準決勝、決勝のチケット販売も手がけている。徳島県内での雇用を視野に、徳島市内に徳島オフィスも開設。「この業界は次から次へと新しい課題が出てくるので、毎日が挑戦です。でもおもしろいですね!」

私生活では長男を調布リトルリーグに入れたご縁で、22年間コーチを務めた。起業をきっかけに「ケジメをつけよう」と思っ「辞めた。実は、日本ハムファイターズの清宮幸太郎、早稲田大学の清宮福太

郎兄弟は調布でヘッドコーチをしていたときの教え子だ。

「息子は報徳学園に入って3年の時に甲子園に行きました。今は、グッチという名前で野球の話題が中心のYouTuberやっています。野球とITの父親の影響が色濃いうだ。

常に課題と向き合う山口さんは、野球少年の夢を大きく広げるシステムづくりにも取り組んだ。

「例えば山間部に住む池田の野球少年は、簡単にプロの選手とは会えないし、ましてやアドバイスをもらうことなどないに等しい。だったら、野球をしている動画を送ってもらって、それを例えばアメリカの大リーグで活躍するダルビッシュ有(MLBのサンディエゴ・パドレスに所属)に見せてアドバイスをもらえるシステムがあれば、少年たちの夢は広がりますよね」と、実際にシステム化した。

京都でバイトをしていた頃から付き合っていた女性がいた。東京で就職するからと別れて上京した。「気がついたら、浦安の部屋にいたんです(笑)」

かたっ苦しくもなく、軽くもない。IT企業経営を目指し、自分の思いを貫き通す、芯がブレない生き様はとても気持ちよく、愉快で参考になる。定期的に人生を覗いてみたいと思える稀有な人である。

(取材・文／北島由記子 写真／永井守)